



教会で祈りを捧げる君に惹かれて…… 台本者：咲夜

dots

「ああ、貴方でしたか。また神に祈りを？」

「……………そうですか。こんなにマメに教会に来ている貴方にはきつと神の御加護がありますよ。」

「神はいつも見守ってくれてるのですから。」

「でも、もうすぐ日が落ちます……………貴方は暗くならないうちに帰らないと。」

「……………私ですか？ ……私は夕陽が映し出すこの教会のステンドグラスが好きでね。此処は時の流れがゆっくりで……………」

「いつも、このステンドグラスを眺めながら……………自分の感情や……………日々の出来事を整理するんです。」

「貴方は良く此処で祈りを捧げてますよね？ ………………え、好きな方……………との成就……………です……………か……………」

「いや、良いんじゃないですか？ ……どんな事でも祈りを捧げる者に神はお力をかしてくれるものです。」

「でも貴方は可愛らしい人なので……………きつと大丈夫ですよ。」

「思いを相手に直接伝えてみてはいかがですか？」

「ふふ、貴方の未来に笑顔が溢れますように私も祈っておきましょう。」

「あ、そういえば、此処の教会は結婚式にも使えるんですよ。いつか素敵な方と人生を共にする決心が出来たら是非……」

「私ですか？ ……私もお相手が見つかって、その方といつか……な—んて、先ずは御相手を見つける所からですが
（笑）」

「……………え？ ……私じゃダメですかって……………えっ

と、…ちよつと待つて……………落ち着いて、……………あの……
ゆつくりで良いから…話してくれますか？」

「……………なるほどねえ…いつも祈りを捧げに此処に来てたのは、実は私に会いに来てくれたのですね（笑）」

「……………いえ、凄く嬉しいですよ。……………本当に相手は私で良いんですか？ 私は貴方が思う程紳士でもありませんよ。」

「なら、ちよつとこつちに来てください。……………さあ、お手をどうぞ？」

「……ここに座って？ ……神の前では嘘なんてつけませんから。」

（相手の正面に回れば一度ゆっくり深呼吸して片膝着いて）

「……私も貴方の事が好きです。……真剣に祈りを捧げる姿、私に挨拶する時の優しい微笑み、……気が付けば此処に来る度に貴方を探していたのは私の方でした。」

「……貴方の事をもっと知りたい。私の事も知って欲しい。……貴方が好きです。一緒にこれからの人生、苦楽を共にしてくれますか？」

「……ありがとう。……ねえ、目を閉じて……」

（ゆっくり近付けば相手にキスして）

「誓いのキス…ですね。」

「さあ、暗くならないうちに帰りましょう？ 送って行きますよ。」

（ドアを開ければ雨に気が付き）

「さつきまで降って無かったのに……結構降ってます」

ね。もう少し雨が弱まるまで中に居ましようか。」

（相手との距離を詰めて相手にキスして）

（ドアを閉めて鍵を掛け※SEあれば）

「ふふ、言ったでしょう？ そんなに紳士じゃないって。」

「……ここに座って下さい。……寒くないですか？ ちよつと待ってて……確かこの辺に………あつた。」

「まあ、もしかしたら神様が…少しゆっくりしていきなさいって…雨を降らせたのかもしれないね」

（相手を座らせればブランケット取りに離れ）

「ねえ………もつとキスしても良いですか？」

「………はい、このブランケット使ってください。………
ねえ、もつとこつち………おいで？」

（相手にキスすればどんどんキスを深めて）

「……そんな顔は初めて見ました。凄く可愛くて色っぽい顔……」

（再び相手にキスして）

「恥ずかしい？ ……ふふ、大丈夫。貴方はとても魅力的ですよ。」

（相手の耳元に唇寄せて）

「……此処が神聖な場所とわかっていても、今すぐ貴方を感じたくなる程に……」

「……私の膝の上に来てくれますか？ ……こうしてたら少しでも貴方を感じれます。」

（相手を抱きしめてキスして）

「はあ………これ以上は我慢出来なくなってしまうそうです。……貴方も私が欲しいと思ってくれてるんですね…」

「凄く嬉しいです。………あの、やっぱり此処じゃダメ………ですか？」

「大丈夫。きっとこの雨が全て隠してくれますよ……」

(相手にキスして)

「嫌だったら言ってくださいね? ……………柔らかな胸……
服越しなんてもどかしいですね。」

「服の裾を咥えてくれますか? ……流石に此処で貴方を裸にする訳にはいかないので…」

「……………何だか自分から触って欲しいって強請ってるみたいですね。…………ふふ、咥えてるから話せ無いですね。」

(相手の胸を舌で責めて)

「貴方の胸、甘い訳無いのに……………甘く感じます。」

「食べてしまいたくなる……………」

「はあ……………可愛い……………」

「反対も……………」

(反対の胸も舌で責めて)

「ねえ、下も触って良いですか？ ……ふふ、スカートで隠れてましたけど……下着…少し濡らしてしまいましたね。」

「これ以上汚してしまう前に脱いでおきましょうか。」

「……ダメですよ、自分で脱ぐなんて。私が脱がせてあげますから貴方は一度膝から降りて横に座って下さい。」

「脱がせますよ………そのまま足を広げて………恥ずかしい？ 暗いし私以外は誰も居ませんから………」

「気持ちいいですか？ まだ指で上下になぞってるだけなの………」

（相手に見せ付けるように指先舐めて）

「ほら、見えますか？ ……少し触っただけで私の指がこんなに………ん、貴方の味がする。」

「もっと欲しい……舐めて良いですか？」

（体制を変えてクンニ開始）

「ん、………美味しいですよ………」

「ふふ、いっぱい奥から溢れてきますよ……………」

「舌だけじゃ足りませんか？ ……指も……………ね？」

「あー、中漣い…トロトロ……………」

「貴方の気持ちいい所は……………此処かな？」

「ふふ、可愛い。……………いきそう？ ……こんな神聖な場所…：神様に見られながら私にイカされるんですか？」

「我慢？ 出来ると良いですね。」

（責める手を激しくして相手がいくまで続けて）

「ふふ、……………あーあ、我慢…出来ませんでしたね。そんなビクビクして…気持ちよかったですか？」

（相手にキスして）

「可愛かったですよ。……………今すぐ貴方とひとつになりたいです……………とはいえ……………こんな冷たくて硬い床に貴方を寝かせるのも……………」

「……………そうですねえ……………私の上に座ってなら大丈夫ですか？」

「対面座位なら密着も出来まし…貴方を床に寝かせなくて済みますから…あ、勿論ゴムはしますよ(笑)」

「なんでって…男性は持ち歩くのがマナーなんです(笑)」

「私も急に必要になる事なんて無いと思ってましたけど…今はちゃんと持ち歩いてて良かったと思ってますよ。」

(近くの鞆からゴム出せばベルトに手をかけ準備して※ベルト外すSE等はおまかせします。)

「これで大丈夫です。……………こつちに来て？ 私の膝の上。」

「ゆっくり腰を下ろして……………大丈夫ですか？」

「首に腕回して……………そう。……………ん？ キスなんていくらでも……………」

(相手にキスして)

「はあ……根元まで入った……痛くないですか？」

「いいように動いて下さい……」

「少し慣れるまでキス……しましょう？」

「私も気持ちいいですよ……熱くて……締め付けてくる……」

（深くキスしてる途中でゆっくり腰動かし）

「はあ、そんなに締め付けられたら私も余裕無いんですが……」

「……すみません、私の方が我慢出来ませんでした。」

「気持ちいいですか？ ……下から突き上げられるの……」

（少し悪戯っぽく笑い）

「ふふ、可愛い声……大丈夫ですよ。どんなに声が出て
も外の雨の音が消してくれます。」

「ゆっくり動けますか？ ……そう、……自分が気持ち

「はあ……そろそろ私もいきそうです……受け止めてくれますか？」

「ん、好きですよ。……はあ、……イ、ク……」

「これが夢じゃないって実感出来るまで……今夜は貴方と離れたくないんです。」

「好きですよ。……貴方の事が大好きです。」

（乱れた呼吸が落ち着くまで抱き締めて）

（相手にキスして）

「初めてがこんな場所で……すいません。我慢出来なくて……」

「少し休んだら……私の家に来ませんか？」

教会で祈りを捧げる君に惹かれて…… 台本者:咲夜

発行日 2023 年 12 月 15 日

著者 dots
<https://www.pixiv.net/member.php?id=100027102>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
